

地域の中で生徒のコミュニケーション力を育む授業実践

～倉敷美観地区商店・施設等のCM作成を通じて～

倉敷市立精思高等学校

〒710-0816
岡山県倉敷市八王寺町199-3

<http://www.kurashiki-oky.ed.jp/school/seishi-h/>

1. はじめに

本校は岡山県南部の観光地として知られている倉敷市に位置し、昭和23年に設置された岡山青年師範学校附属高等学校を発端とし、昭和26年3月に岡山県立倉敷至誠高等学校日吉分校並びに同校夜間部定時制課程を統合し開校した4年制夜間定時制高校である。かつては、多くが社会人として働きながら学ぶ勤労青少年のための学校であったが、近年ではマイペースで学びたい生徒や、中学校までの教育の中では自分の能力や適性を十分に生かすことが困難で本校で学び直そうとする生徒がほとんどである。

校内のICT環境といえは平成22年度に、全普通教室に短焦点型プロジェクターが設置され、また校内無線LANの設備もあり、授業の中でICT機器を使いやすい環境にある。

2. 研究の目的

本校は、夜間定時制高校であり、多様な生徒が入学してきている。小・中学校時に、不登校もしくは登校しても教室に入らなかったことのないなどの経験を持つ生徒も少なくない。そのため、他者とのコミュニケーションに苦手意識を持っており、他者と主体的に関わったり話をしたりしようとする態度が育っていない。したがって、情報の送り手・受け手として相手と正確に情報をやり取りする

ための表現力や読解力が不足している。また生徒の意識調査のために、最初の授業でA. 自分について、B. 周囲とのかかわりについて、C. 倉敷について、D. ICT活用についてのそれぞれの項目について4件法と自由記述によるアンケートを実施した。その結果、「私は人から必要とされている」「私は役に立つ人間だと思う」という質問項目で肯定的回答をした生徒が少なく、自己肯定感が低い生徒が多いことがわかった。

本研究では、生徒が他者と繰り返しコミュニケーションをとる機会を設けた。そして、生徒自身が計画を立て表現活動を行うことで、社会を構成する一員としての態度を身につけさせようとした。主体的に相手に関わったり、相手の意図を理解しようしたりする社会性を養い、自己肯定感と自らのコミュニケーション力を高めることを本研究の目的とした。

3. 研究の方法・内容

本研究では、学校設定教科・科目「社会科学入門」を中心に実践を行った。「社会科学入門」では、「社会科学の学習に必要な基礎的リテラシーと知識を習得」することを主眼に置き、資料の活用能力、思考能力、表現能力の育成を目指している。そして、本研究では、この「社会科学入門」の中で「コミュニケーション力の育成」を図ると

ということで、地域のCM制作を行うこととした。ここで言う「コミュニケーション力」とは、①自分の考えを表現する力、②他者の考えを聞く力、③双方の妥協点を導き出そうとする態度を持つ力とする。これらを踏まえて、以下のように研究を行った。

倉敷の代表的な観光地である美観地区に関するCM制作を実施する。生徒を6～8名のグループに分け、ディレクター、サブディレクター、企画班、撮影班、編集班の役割分担を行う。美観地区に一度も行ったことのない生徒もいるため、制作に入る前に美観地区に行き下調べを行わせる。



美観地区の下調べ

その後、必要に応じて商店や施設と打ち合わせ、撮影、編集作業に入る。仮完成した作品(以下CMプロトタイプという)を生徒同士で批評させ、また協力していただいた商店の方にも見ていただき、修正が必要な点を見つけ、再度編集作業を行う。映像制作の基本的な知識については、一連の流れを説明し、作業の場面に応じてその都度授業で学習させた。最終的に完成したCMは本校や、協力していただいた商店のホームページにて公開する。

「商店・施設の担当者と打ち合わせ」→「CM作成」→「CMについての評価」→「CMの修正」というPDCAサイクルを繰り返すことにより、CMの完成度を高めていくとともに、コミュニケーションに必要な能力と社会性を身に付けさせる。本研究の評価については、授業の事前事後における生徒のコミュニケーションに関する意識調査

(四件法)や自由記述方式で生徒の事前事後の意識の変化を分析するテキストマイニングにより行うものとする。

4. 研究の経過

【事前学習】

CM制作に入る前に、社会科学の学習に必要な基礎的リテラシーと知識を習得させるために、地図の読み方や簡単な地形学習を行った。その中の教材として、地域の地図を用い、CM制作をする上での予備知識を身に付けさせた。

CM制作では、まずiPadやデジタルカメラ、デジタルビデオカメラによる撮影技術、機器使用方法の習得と倉敷やCM対象である美観地区の歴史についての学習を並行して行った。

CMの撮影には、デジタルカメラ5台とデジタルビデオカメラ1台を用いた。デジタルカメラは、主に散策およびロケーションハンティングに用い、ビデオカメラは、本編の撮影に使用した。デジタルカメラ、デジタルビデオカメラともに生徒の使いやすさを第一に考え、エントリーモデルで軽量なものを使用したため、操作を習得するための時間はさほど要さなかった。

倉敷市や美観地区の歴史学習では、一斉授業の形式だけにならないように注意し、グループ活動でKJ法による地域のイメージの共有化を生徒同士で図った。また、生徒個人で美観地区についてのレポートを作成した後、プレゼンテーションを行い生徒同士で評価しあうことで、相手を意識した情報伝達の重要性を認識させた。こうした、活動を4月から5月にかけて行った。

【CM制作活動】

6月に入り、実際にCM制作に向けて班編成を行った。夜間定時制であることから、撮影が可能な昼間の時間帯では仕事のある生徒が多い。また、編集作業に使用する編集ソフト「ロイロスコープ

2」は、本校サイエンス部が地域への開放講座などで使用していることもあり、使用に慣れている生徒もいたことから、それらをふまえた上でグループ分けを行った。そして、美観地区探索から班別に企画会議を実施し、CM作成する商店・施設の候補を決めた。商店・施設の交渉には教員も関わりながら行っていったが、交渉に伺った全ての商店・施設に了承していただいた。

その後、班別作業に移り、企画班による絵コンテ制作、撮影班によるロケハン、編集班による編集ソフトの使用法の習得を行っていった。企画の段階で絵コンテを作成する際、撮影した素材を確認するために用いたのがiPadである。パソコンで、素材を確認することも可能だが、iPadは、写真の拡大や選択も容易で、iPadを囲んでの話し合いも行いやすいという利点もあり、企画をする際に力を発揮した。企画をある程度進めた夏休み前に、福山大学三宅正太郎教授に絵コンテに関する助言と撮影技法の講義をしていただく予定であったが、当日暴風警報で臨時休校となってしまい、教員向けの研修という形で実施した。このため、9月に入り、教員で各グループに対して企画案へアドバイスを出す形となり、計画が遅れることとなった。

しかし、ここでもう一度企画を練り直す時間を設けたことで、情報を発信するだけでなく、情報の受け手のことも考えてCMを作る必要性に気付かせることができた。そして、9月中旬までに各



美観地区での撮影

グループの絵コンテが完成し、それぞれ商店・施設へ説明し、制作への意見をいただいた。この間、授業では毎時間各グループごとに企画会議を行うことで、各班ごとの進行、さらに、CMイメージの共有化などを図ることができた。

10月上旬には多くのグループが撮影を終わり、その時期に、著作権について触れた。実際に、編集作業と同時に撮影班では、音源集めやテロップ、ナレーションなどを行う必要があり、著作権について触れおく必要がでてきたからである。音源に関しては「NHKクリエイティブライブラリー」から著作権フリーのものから選んだ。また、クラスごとに各グループのCMを見て生徒同士がアドバイスを出し合い、それも参考にしながら、11月上旬までにはすべてのグループでCMプロトタイプが完成した。CMプロトタイプは商店・施設へ見ていただき、意見をいただいた。



iPadとパソコンを使つての編集作業

12月に山陽新聞社編集局メディア報道部の赤田貞治部長に、専門家の目から見た各グループのCMへの助言をいただき、それらを元に1月に完成版の制作に入り、3月に各商店・施設へ完成版を見ていただいた。

【公開】

生徒たちが作成したCMは様々な場面で公開することができた。絵コンテの段階では、第7回福山大学高校生CMコンテスト絵コンテ部門で奨励賞をいただいた。11月には、岡山市で「第22回全国産業教育フェア岡山大会」が開催され、本

校もブースを出店した。



第22回全国産業教育フェア岡山大会での本校ブース

そこで、プロトタイプの段階ではあったがCM作品を放映した。その結果、多くの人目に触れることになるとともに、制作に向けての目途が立ち、生徒が意欲的に取り組むことができた。12月には山陽新聞Web Newsに取り上げていただき、生徒が制作した作品の中から2作品が公開された。また、授業でのCM制作活動を土台に、4人の生徒が「岡山まちの夢学生アイデアコンテスト」に「倉敷CMコンテスト～きらりと光れ倉敷市、CM作ってまちおこし～」と題して、倉敷市を題材として、地域、商店、専門家がつながりを作るきっかけになるCMコンテストを開催するという企画を提案し応募したところ、優秀賞を頂いた。自分達の企画を発表することを通して、CM制作の取り組みを多くの方々に知っていただくことができた。1月に本校で開催したICT活用授業研究会で、CM制作活動の様子を岡山県内の教員、企業からの参加者に見ていただき、多くのご意見をいただいた。

今年度、作成したCM作品は、現在本校ホームページにて公開している。

5. 研究の成果と今後の課題

【研究の成果】

まず1つ目は、地域の中で生徒のコミュニケーション力を育成していくためにCM制作活動をとることができる環境ができたことがあげられる。今回、特別な機器を使用せず、生徒にとって身近

な機器や、使い慣れたものを使用しての作業であったことで、互いに教えあったり、制作に向けて助け合う様子が多々見られた。

2つ目は、相手の立場に立って、自分の考えを表現できる生徒が増えたことである。CM制作を経験することで、これまでは情報を受け取る側であったのが、情報を発信する側の立場も経験することができた。そのことから、相手に自分が持っている情報を伝えるためにはどうすればよいのか、どう表現すればよいのか考えるようになってきた。また、制作活動に入ってから、企画会議や、商店との打ち合わせを頻繁に行った。その中で、表現の仕方により、伝わり方が変わることを経験するとともに、正しい表現の仕方を知ることができ、それを他の場面で活用できるようになった。

3つ目は、社会・地域とのつながりを持つきっかけとなったことである。本校の生徒の様子は前述したが、今回のCM制作活動により、商店・施設や地域の人との関わりを持ったことが、生徒達の自信になり、様々な形で社会参画を行おうとする生徒が出てきた。また、生徒たちの多くは、この活動を行うまでは倉敷美観地区には自分たちのような若い世代が行く商店・施設があまりないと考えていたが、近年、若い世代を集客するために、行政・地域一体となって開発を行っていること知り、実際にそうした商店・施設に行き、そこで説明を受けることで、美観地区への興味・関心が高まり、休日に美観地区に遊びに出かけたり、美観地区でアルバイトを始めたりする生徒もでてきた。

【今後の課題】

まず第一には、地域との交流の機会に班によって差が出てしまったことが挙げられる。今回、美観地区の商店・施設という条件以外は特に制限はしなかった。そのため、班ごとで取り上げる商店・施設選びに時間差が生まれたり、企画に差が出てしまい、商店・施設との打ち合わせがあまり

出来なかった班もでてきた。こうしたことを防ぐためには、今年度は自由に生徒に施設や商店を選ばせていたが、次年度以降はある程度教員側で商店・施設を決めておきその中から選ぶ、商店・施設側から依頼を受けてCM制作を行うといった仮定を作った上で制作を行うなどの条件付けを行い、商店・施設を選び上げやすい状況を作る必要があると考える。

次に生徒の制作活動に対する意欲をどう維持させていくかという課題である。今年度は、6月から1月までと長期間にわたって制作活動を行った。また生徒たちが作成したCMを公開する機会が限定的になってしまったことで、生徒たちのCM制作への意欲を欠いてしまうことになってしまったのではないかと考えている。次年度以降は2学期に集中して制作活動を行い、また公開の機会も本校ホームページだけでなく、外部の機関にも依頼し、より多くの方々にCMを目にして頂き、ご意見を頂くことで生徒の意欲を持続させたい。

最後に、この活動の評価をどうするのかという課題がある。今年度は、ポートフォリオによる評価を行ったが、コミュニケーション力の向上としてふさわしい評価方法であるか疑問が残った。評価方法についても、今後の課題として研究を続けていく必要がある。

6. おわりに

前述したように、本校はICT機器を利用する環境が比較的整っている。しかし、ICT機器はあくまでツールであり、教育効果がみられる活用

法が必要である。本研究の目標は、ICT機器を活用しながら地域学習を通して生徒のコミュニケーション力を育んで行くことである。CM制作のために、地域の方々と連携し、企画会議を繰り返すことで、相手の立場に立ったコミュニケーションの在り方を学んでいったことは大きな成果であった。

また、本研究の実践は他教科でも活用された。英語科では、iPadを利用して英語ミニ番組を作り、発音練習などを行っていた。体育科では、生徒の身体の動きを撮影し、フォーム矯正に活用した。商業科では、伊東香織倉敷市長に出演していただいたミニ番組を制作し、第22回全国産業教育フェア岡山大会で放映した。また、授業以外でも生徒会執行部が学校紹介や卒業生のための動画制作が行われていたことも本研究がきっかけとなっており、効果があったと思われる。

こうした実践を一つ一つ積み上げていくとともに、今後はYouTubeでの公開やFacebookの活用などを模索しながら公開の場を広げていきたい。そのためにも、本研究を基礎としながら、今後も、発展的な活用を検討していくとともに、勉強会や各種研究会にも積極的に参加して研修を重ねながら、ツールとしてのICT機器の可能性を教員同士が連携を取りながら追求していきたい。

最後に、本研究にあたって協力していただいた多くの先生方、また研究機会を与えていただいたパナソニック教育財団に感謝を表わしたい。